

素靈難ガイドダンス 5 經脈整理の歴史

平成二十八年三月二十七日 青鳳会

講師 吉野 久

1

經脈・經絡に関する記述をさかのぼると、もっとも古いものは、現在では馬王堆医書(陰陽十一脈灸經・足臂十一脈灸經)に行きつく。

この医書は、1972年から73年にかけて、中国湖南省の長沙で発掘された馬王堆漢墓3基のうち、長沙国丞相韓(だい)侯利蒼(りそう)の男子を葬った3号墓から出土した14種類の医書類である。これらの医書のほとんどは絹に書かれた帛書である。

この墓の主人が下葬されたのは、漢王朝の第5代目の文帝の初元12年(前168)であるから、これらの書の抄写年代はそれ以前の、戦国時代から秦末漢初のもものとされる

馬王堆医書に著された經脈

※温…脈

足臂十一脈灸經	陰陽十一脈灸經	靈枢經脈篇
足泰陽温※	鉅陽脈	手の太陰肺經
足少陽温	少陽脈	手の陽明大腸經
足陽明温	陽明脈	足の陽明胃經
足少陰温	肩脈	足の太陰脾經
足泰陰温	耳脈	手の少陰心經
足峙陰温	齒脈	手の太陽小腸經
臂泰陰温	大陰脈	足の太陽膀胱經
臂少陰温	厥陰脈	足の少陰腎經
臂泰陽温	少陰脈	手の厥陰心包經
臂少陽温	臂鉅陰脈	手の少陽三焦經
臂陽明温	臂少陰脈	足の少陽胆經
		足の厥陰肝經

この経脈リストを見て気づくのは、手足でいえば足の脈が先に、陰陽でいえば陽脈が先に記されていることである。

その後に著される靈樞・經脈¹⁰の配列と比べると、大きな違いがある。

右表を、靈樞・經脈篇に対応させたもの

靈樞經脈篇の経脈	陰陽十一脈灸経	足臂十一脈灸経
手の太陰肺経	臂鉅陰脈	臂泰陰温※
手の陽明大腸経	齒脈	臂陽明温
足の陽明胃経	陽明脈	足陽明温
足の太陰脾経	大陰脈	足泰陰温
手の少陰心経	臂少陰脈	臂少陰温
手の太陽小腸経	肩脈	臂泰陽温
足の太陽膀胱経	鉅陽脈	足泰陽温
足の少陰腎経	少陰脈	足少陰温
手の厥陰心包経		
手の少陽三焦経	耳脈	臂少陽温
足の少陽胆経	少陽脈	足少陽温
足の厥陰肝経	厥陰脈	足埤陰温

馬王堆医書の内容を見ると、灸法の経脈書として、「足臂十一脈灸経」「陰陽十一脈灸経」甲本・乙本、診脈法として「脈法」「陰陽死脈候」、薬法として「五十二病方」、養生法として「却穀食氣」「養生方」、導引法として「導引圖」、産科法として「胎産書」、その他の療法として「雜療方」をおさめている。く

次いで古いとされているものは、素問・脈解篇であるが、ここには、馬王堆医書の内容より古いとされるものはない。また「脈解」と名づけてあるが、ここに太陽から厥陰まで列挙してあるものは、經脈の名ではなく、時候の命名である。靈樞が經脈をもとにした治療法を確立してゆくのと対照的に、素問は太陽、少陽などを時候の名として取り入れてゆく。

脈解篇の冒頭に「太陽寅、寅太陽也」とあり、これは前漢時代に定められた太初暦の内容であることから、脈解篇の成立の上限は、BC104年を遡らないとされる丸山昌朗(まさお)「素問の栞」。

素問・脈解篇は脈經(王叔和の脈經)以前の古脈經の解説のために書かれた篇である。荻生徂徠は「素問評」の中で、文体や使われた文字を考えると、脈解篇は大奇論とともに最も古い篇であろうとしている。また、扱っている病症の系統は、馬王堆医書と同じであつて、靈樞・經脈とは異なる。 島田隆司」

・素問・脈解篇⑥……太陽の時候から厥陰の時候までに現れる病症

所謂「〜」として、様々に取り上げ、その原因を気の在り方がどうかという面から解説している。經脈の走行には一切触れていない。所謂「〜」という書き方をすることで、他書にある病を、著者の見方で解いたものとも考えられる。

一 太陽

①太陽のいわゆる腰、殿部が腫れ痛むのは、正月である(に起る)。太陽は寅。

正月は陽気が出て上にあるが、陰気も盛んで、陽は自ら次ずるを得ないので、腰・殿部が腫れ痛む。

②冬の寒さが厳しい折に、不足のある者は、いわゆる偏虚となり、跛になる。偏虚とは、正月の陽気が、凍った地を解かして、気が出る時期である(に起る)。

③いわゆる強上して背に引くのは、陽気が大いに上り、争うので起る。

④いわゆる耳鳴は、陽気して万物が盛上して躍るから耳鳴りが起る。

⑤いわゆる(脈状が)甚だしければ狂癲疾するとは、陽が盡く上にあり、陰気は下る、下虚上實となるから起る。

⑥いわゆる(脈状が)浮が聾を爲すというのは、みな気に(原因がある)。

⑦いわゆる入中(腹に何かが入る)して鞫になるのは、陽の盛りが已り衰えているからである。内奪して厥すれば鞫廢(俳)し、これ

は腎虚。少陰の至っていない場合は、厥する。

以下、☐ 少陽、☷ 陽明、☶ 太陰、☵ 少陰、☱ 厥陰
とつづぐ。

3

その後、AD79年に白虎観会議が開かれたが、この中で、五行説と陰陽論についても整理がされた。この成果について後漢の班固のまとめたものが、

「白虎通義」である(87～88年)。

筆者がテキストとして通目したものは、「白虎通疏証」卷二(早稲田大学データベース)であるが、この「五行」の項目に述べられていることを、順にナンバーを付して整理すると、次のようになる。

1・1 天の氣を承けて、地が行なう活動の説明。活動の五要素が、金、水、木、火、土の五行である。

また、尚書を引いて、水、火、木、金、土と説く。

1・2

水・北・陰氣・化して沾濡す・言たれば淮

木・東・陰陽の氣動いて、萬物生ずる・言たれば觸

火・南・陽上る・萬物垂枝す・言たれば委隨

金・西・陰起きる・萬物を禁止す(自由をうぼう、軟禁する)・言たれば

禁

土・中央・萬物を吐(あらわれる)含(口にふくむ)す

(水生木だけを述べている)

礼記・樂記を引いて春・生、夏・長、秋・収、冬・藏

土は最も尊いので、方位や直接の仕事には与らない。

1・3

五行の性質

火・陽・尊い・上る

水・陰・卑しい・下る・少陽(陽が少ない)

金・少陰(陰が少ない)・可曲可直、從革

土・最も大いなり

(木について述べていない)

五行が二陽三陰である説明・・・土は尊いので天に配する。火と金は陽、木と水は陰で偶(つりあ)っていると説くが、木について述べていないので、破綻があ

る。

尚書を引いて、水は潤下、火は炎上、木は曲直、金は從革、土は稼穡

※少陽、少陰の概念は、五行の性質の説明として用いられている。

一・4

五味

水味・鹹・北方・堅

木味・酸・東方・達

火味・苦・南方・長養

金味・辛・西方・搬

土味・甘・中央・中和

尚書を引いて、潤下は鹹、炎上は苦、曲直は酸、從革は辛、稼穡は甘を
作す。

一・5

五臭

北方・水・萬物幽藏・臭は腐朽

東方・木・地中より新出・臭は妥

南方・火・動きを承ける・臭は焦

西方・金・成熟し復諾す・臭は腥、

中央・土・養・臭は香

礼記・月令を引いて、東方・妥、南方・焦、中央・香、西方・腥、北方・朽、
東方・動方、南方・任養之方、西方・遷方、北方・伏方

□ 少陽、太陽、少陰、太陰、中宮

	少陽				太陽				少陰				太陰			中宮
	十二支	律			十二支	律				律			十二支	律		
	見	寅	太簇	正月	巳	中呂	四月		申	夷	七月		亥	應鐘	十月	
	盛	卯	夾鐘	二月	午	蕤賓	五月		酉	南呂	八月		子	黃鐘	十一月	
	衰	辰	姑洗	三月	未	林鐘	六月		戌	無射	九月		丑	大呂	十二月	
言		率														
十干		甲			丙				庚				壬			戊
		乙			丁				申				癸			己
時		春			夏				秋				冬			
位		東方			南方				西方				北方			
色		青			赤				白							
音		角			徵				商				羽			宮
帝		太皞			炎帝				少皞				顓頊			黃帝
神		句芒			祝融				蓐收				元冥			后土
精		青龍			朱鳥				白虎				玄武			

※ ここでの少陽、太陽、少陰、太陰は、Ⅰ・Ⅲと違って、地気の陰陽の多寡を表すものである。これに従って、前漢の大初暦では太陽が正月に割り当てられていたが、ここでは少陽が正月に割り当てられている。
 また、ここまでのⅠ、Ⅱの内容が、素問では陰陽慶象大論⑨に収斂されてゆ



目 礼記・月令を引いての律の記述
(割愛)

㉓・1 五行の相生 木↓火↓土↓金↓水↓木
木王するとき…火・相(補佐)

土・死

金・囚(とらえる)

水・休

㉓・2 五行の相剋

衆↓寡…水↓火

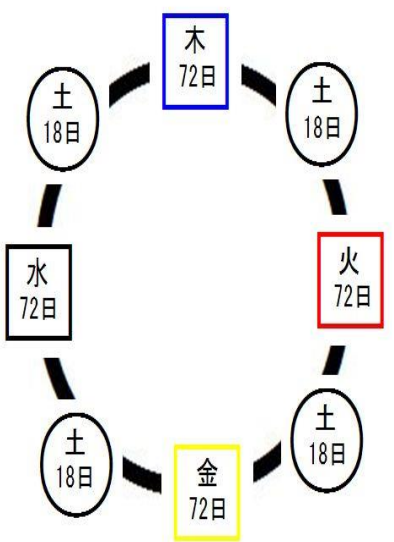
精↓堅…火↓金

剛↓柔…金↓木

專↓散…木↓土

實↓虚…土↓水

㉓ 五行の一年に対する配当



㉓ 雑論 r: a g
(割愛)

㉓ 雑論 r: 1 3 4 3
(割愛)

次いで靈樞において經脈の流れ、三陰三陽の配当などが決定された。經脈については、素問よりも靈樞に詳しい。

● 靈樞における經脈の整理

經脈に関しては、素問・靈樞・難經の三成書のうち靈樞がもつとも詳しい。まず根結篇5で、經脈の大まかな流れが根(起点)と結(終点)という形で示されている。同時に、根から絡穴までの流注も記されているが、手足の三陽經について記されているだけで、陰經については記されていない。靈樞で十二經脈が整理される前段階での經脈觀がまとめられた篇として位置づけられるのではない。

次に經別篇11で、起点から絡穴までの流れが十二經脈すべてについて述べられ、絡穴以降の流注、合する經脈名までが記される。位置づけとしては、根結篇5の補足ではあるまいか。

さらに經脈篇13では、全經脈の流注、その是動病と所生病、病症の盛虚による補寫などの刺法、靈樞独自の脈診法である人迎寸口診までが述べられるようになった。支脈についてもすべて記されている。ここで、經脈の整理は完成されたと言ってよいであろう。

次いで本愈篇2では、十二經脈と藏府との関係、井榮兪經合の配当までが記されている。藏と府の陰陽関係、傳道之府(大腸)、受盛之府(小腸)などの名称についても述べられ、素問・陰陽應象大論との関連にも注目しなければならない。白虎觀會議の成果をもとにした、これ以降の經脈觀を提示した篇であり、重要と見え、靈樞の中でも、冒頭の九鍼十二原篇1の次に置かれている。

經筋篇13に記されている經脈上の筋、また經水篇12にある地理上の河川と經脈の関係などは、前の4篇からすると、附篇という位置づけになるのではないか。

根結篇5：…太陽、少陽、陽明、太陰、少陰、厥陰の根(起る穴・至陰)〜終る場所

(命門||目) また、足太陽・少陽・陽明、手太陽・少陽・陽明の根(起

る穴・至陰)〜絡穴(飛揚)

經別篇11：…十二經脈の支脈の別れる場所と、その後の正脈の走行部位、合する

經脈

經脈篇10：…十二經脈の走行部位、是動病、所生病

治療法として、病症の盛虚による補寫、寒熱・陷下・不盛不虛の時の

刺法、人迎寸口診の診方

五陰氣、六陽氣の絶するときの病症、

十二經脈の支脈の別れる位置||絡穴 十任、督、脾の大絡

本俞篇2…肺、心、肝、脾、腎、膀胱、膽、胃、三焦、小腸、大腸(の經脈)の井榮俞經合穴

また、天突、人迎など九脈動部について

上關、下關、犢鼻の刺法、

藏府の陰陽関係、傳道之府(大腸)、受盛之府(小腸)などの名称、
四時による刺法の違い

經筋篇13…十二經脈の走行部位にどんな筋があるか

經水篇12…十二經脈の、地理上の河川・内の藏府との呼应関係

【参考】

・素問・經脈別論21…①人の動静、勇怯によつて脈が変わる。②様々な外因によつて、汗が胃、心、腎、肝、脾から出る。③飲食が胃に入つてのち、五藏の気がどう働くかという生理觀。④太陽、少陽、陽明、太陰の脈の強いときを、どんな状態と診るか。

④が經脈別論の名の由来となつた部分。

別論と名のついた篇は素問に三つあり(陰陽別論7「五藏別論11」經脈別論21)、王冰が本来の素問の内容と違う別派の考えとして別論と名づけた。しかしこの三者はともに、全元起本の四卷、五卷に収められており、全元起本四、五卷に初期素問の中心的な論篇であつたと考えられる。とすれば、別派と考えるよりは、經脈を別つ、弁別する論と捉えた方がよい(藤木、島田)。

5

その後、難經において奇經八脈が整理されることとなるが、素問・刺腰痛篇などには、まだ未整理の脈が現れている。

難經に著された脈

二十六難…十二正經十各々の絡脈、その他に三絡がある(陽絡Ⅱ陽權の絡、陰絡Ⅱ陰權の絡、脾の大絡)。

二十七難…十二經に関わらない八奇經がある。

陽維脈、陰維脈、陽權脈、陰權脈、衝脈、督脈、任脈、帶脈

二十八難…奇經八脈の走行部位

第二章			
脈名	条文の取穴	現在の脈名	現在の穴名
解脈 _1	膝の筋肉の分間、踞の外廉の横脈、血を出す	膀胱經の一行、二行	委中
解脈 _2	踞中の結絡、血を出す		委中
同陰の脈	絶骨の端	足少陽の別絡	陽輔
陽維の脈	遂下間、地を去ること一尺	足太陽脈から起こる奇徑	承山
衡絡の脈	踞の陽筋の間、踞を上ること数寸	足太陽脈の内行と外行を結ぶ絡(大腿後側に横に並ぶ)	委陽、殷門の二穴
会陰の脈		足太陽の中脈で、後陰で会合する	
	直陽の脈の刺所として喬上、踞下五寸		喬上・下の横居絡脈(楊)、飛陽・承山(森)
直陽の脈			

第一章			
脈名	条文の取穴	現在の脈名	現在の穴名
足太陽脈	踞中、血を出す	膀胱經	委中
少陽	成骨の端、血を出す	胆經	(陽稜泉)
陽明	囨前を三瘡	胃經	三里
			三里、上下巨虚
足少陰	内踝上二瘡	腎經	復溜
厥陰之脈	魚腹の外	(肝經)	(蠡溝)
厥陰之脈は太素では「居陰之脈」			太陽の絡

【参考】
素問・刺腰痛篇に著された脈

脈名	条文の取穴	現在の脈名	現在の穴名
飛陽の脈	内踝の上五寸	陰維脈	内踝の上二寸の復溜
昌陽の脈	内踝の上の大筋の前・太陰の後で、上踝二寸	陰喬脈	復溜・交信
散脈	膝前の骨肉の分間、外廉の絡、束脈	足少陰・厥陰を合わせた脈	陽交、陽稜泉、陽関
		足太陰の別脈	地機
肉里の脈	太陽の外、絶骨の後 (甲乙経では端)	足少陽	陽輔